チェコ共和国に於ける『東海道四谷怪談』

―ヨエ・ホロウハ著『オユヴァイナリダイミョウジン』をめぐって―

ペトル・ホリー

一　はじめに

本稿題目として、日本愛好家、作家、そして美術蒐集家としての業績を為し遂げたチェコ人Joe（ヨエ） HLOUHA（ホロウハ）（一八八一～一九五七）をとりあげるのは、二つの理由からである。一つには、ホロウハはチェコに於いてはじめて『四谷怪談』を紹介した。一九二〇年のホロウハ著作『恐怖の東屋』（Pavilon hrůzy）[1]の中の一話で、『オユヴァイナリダイミョウジン』と標題されているホラー短編はまさに『四谷怪談』から題材を借りている。二つには、ホロウハがとらえた『四谷怪談』は、その後学術的に紹介された戯曲の翻訳より大きな衝撃を与えた。

チェコ語で書かれた『四谷怪談』をテーマにしたものはこれまで短編が二つ、戯曲としての翻訳が一つある。出版年順に紹介しておこう。一九二〇年にホロウハの『恐怖の東屋』が出版された。戯曲としての『東海道四谷怪談』紹介されたのは、一九七五年にプラハで出版された『松風―日本の演劇』[3]である。本書は、チェコ共和国（以後、チェコと略す）において、日本の演劇を紹介する学術書としての基本著書でもある。一九八六年に出版されたJiří Janoš（イジー・ヤノシュ）著『日本に興味を持つための99話』[2]にも、『四谷怪談』を題材にした『古き江戸の恐ろしい幽霊お岩』という話が掲載されている。

普段は、日本趣味的な、今で言えば安っぽい感傷的表現で綴られた本を書いたヨエ・ホロウハが、恐怖というテーマを選んだことは、早稲田大学大学院文学研究科芸術学演劇映像専攻で歌舞伎、特に『東海道四谷怪談』の怪奇現象を研究している小生の興味を深く惹いた。前述した日本演劇の学術書『松風――日本の演劇』に於いて紹介された『東海道四谷怪談』の翻訳は、全編ならぬ部分訳であり、人間のドラマとして評価の高い四幕目の「深川三角屋敷の場」がその中心となっている。『東海道四谷怪談』の翻訳から削り取られた怪奇性がホロウハの『オユヴァイナリダイミョウジン』にはあった。同じチェコ人である小生は、ホロウハの生温い描写に恐怖を感じている。本稿の志向として、ヨエ・ホロウハの人物像及び『四谷怪談』への関心を紹介することとし、日本語への初訳となる『オユヴァイナリダイミョウジン』の拙訳を付録とする。

二　ヨエ・ホロウハの生涯

十九世紀のチェコは十七世紀から続くハプスブルグ家による支配下にあり、オーストリア・ハンガリー帝国に分断統治されていたにもかかわらず、「民族再生運動」が著しく行われた。また、遥かなる外国を知ろうという動きが文学などでしばしば見られる。日本に関する知識はチェコの地に主として外国から間接的な道を辿って入っていた。[4]他のヨーロッパの国々と同様、十九世紀後半にチェコでも「日本」を題材とする旅行記というジャンルが流行っていた。A.B.ミットフォード（一八三七～一九一六）著『Tales of Old Japan』から題材を借りて、チェコの作家・詩人であるJulius Zeyer（ユリウス・ゼイエル）（一八四一～一九〇一）は、チェコ初の日本趣味的小説（ジャポヌリー）、『ゴンパチとコムラサキ』（*Gompači a Komurasaki*）を一八八四年に出版し、一九三九年までの間、九つの再版を重ねた。また、ヨゼフ・コジェンスキー（一八四七～一九三八）[5]は若い頃から古生物学などに携わり、教職に従事する傍ら、ヨーロッパ各地、一八九三～四年に世界一周旅行をした。明治二六年十月二日に外国人旅行免状、十月六日に「墺太利国ボヘミア州官立学校長」[6]と宛てた紹介状を手に日本各地を視察し、視察記録書[7]を出版した。日本の伝説、間接的に紹介された文学、浮世絵などに影響された日本趣味的文学によって十九世紀後半のチェコの読者は、日本をややエキゾチックな国として見なすようになった。

このような雰囲気の中、一八八一年九月四日にムラダー・ボレスラフ近辺のポトゥコヴァーニュ村のビール醸造所でヨゼフ・ホロウハが生まれる（ヨエ・ホロウハは筆名である）。ホロウハの父、同名ヨゼフ・ホロウハはビール醸造業者であり、一八八五年に家族と共にロウドゥニツェの近くにあるリボホヴィツェに引っ越し、若きホロウハは小学校に通い始める。[8]八歳弱にして、弟カレル（後にSF作家になった）と共に小説家になりたいという希望を抱いた。[9]後に、ムラダー・ボレスラフ市立高等学校で学び、高等学校二年生の時にA. Brassey著『世界周記』とヒューブナー著『世界周遊記』[10]を読み、感銘を受ける。一八九四年の冬に高校三年生に母方の親戚であった、

前記のヨゼフ・コジェンスキー著『世界周記――日本編』を読み、日本の風景、芸者の写真などを初めて目にする。一八九五年の夏休み前に、現在もなお知られているビールの老舗、聖トマーシュ修道院醸造所（一三五二年創立）を賃借した父（賃借期間一八九五～一九一〇年）は、家族を連れてプラハに引っ越す。名所醸造所のビア・ホールには当時、チェコのインテリ、芸術家、そしてボヘミアンたちなどが集まって、一つの文化サロンをなしていた。同年、ホロウハはプラハのマラー・ストラナ地区レテンスカー通りにあった高等学校へ転校する。一八九七年にレッスル通りチェコスラブ商業アカデミーの学生として、日本と東洋美術蒐集活動の礎を築き、チェコの旅行家たちコジェンスキー、ヴラース、[11]ホルップ[12]に会い、現プラハ・ナープルステク博物館の創始者ヴォイタ・ナープルステク（一八二六～一八九四）の未亡人ヨゼファ夫人などにしばしば招宴される。[13]ナープルステクは、日本の物をはじめて一八六三年に入手して以来、[14]コレクションは段々と拡大した。ホロウハは、後にその多大なる貢献者となった。なお、ホロウハは聖トマーシュ醸造所で初めて、プラハの骨董屋などで蒐集したものの展覧会を行う。本来は作家になろうとしていたホロウハは、一九〇二年に自らの幻像（ファントム）、「日本の恋人（ヒアマン）」を題材に小説を書き始め、時を同じくして日本語を勉強する。また、Hippmann（ヒアマン）編集長の雑誌 *Český svět*（チェスキー・スヴィエット）（「チェコの世界」）や A. E. Mužík（ムジック）編集長の雑誌 *Světozor*（スヴィエトゾル）に日本美術について投稿する。[15]プラハ国立美術館東洋美術部学芸員ヘレナ・ホンコポヴァー氏は、ホロウハが書いた『ヨゼフ・コジェンスキー～世界を一周した最初のチェコ人』という記事を挙げている。[16]ナープルステク未亡人の紹介により、馬の飼育のため、チェコに派遣された南部榮太郎男爵に知り合う。[17]ホロウハによると、南部氏はしばしば聖トマーシュへ顔を出していたが、「彼のドイツ語が乏しかったため、私にとって詳しい話をするような相手ではなかった」という。ついに二四歳弱にして、一九〇五年に『嵐の中のサクラ』（*Sakura ve vichřici*）をプラハの Vilímek（ヴィリーメック）出版社から出版した。憧憬のまとであった日本への気持ちを見事に綴った小説ではあるが、その内容、チェコ人美術収集家の、若い娘サクラへの愛は悲劇的な終末を呼ぶ――外国人との結婚を許されないサクラは自害する――というストーリーは、現代から見ればやや陳腐であろう。にもかかわらず、ホロウハは、日本を訪れる前であったが故に、その知識には驚かざるを得ない。この類のテーマは当時、世界的に好まれ、ロティの『お菊さん』[18]（一八八八年）や、海軍士官ピンカートンと長崎の雛妓蝶々さんの愛の破綻を主題にしたプッチーニ作曲、歌劇『マダムバタフライ』（一九〇四年）などにも使われ、ホロウハは例外ではない。

感傷的な小説『嵐の中のサクラ』はベストセラーとなり、後に版を重ねる。一九二九年版は五万冊までのぼる。[19]とてつもない成功を納めたホロウハは、父に財産の分配を促し、独立した。父の好意と作家としての成功により、日本に行く準備がととのった。一九〇六年一月にドイツ北西部のブレーメンでバイエルン号に乗船し、フランス、スペイン、ジブラルタル海峡、地中海、スエズ海峡、インド、中国を経て、三月二日に神戸に到着する。[20]神戸には留まらず、直ぐに大阪へ向かう。ホロウハ（図I）はピエール・ロティ[21]のような体験をしたく、三月三十一日に、日本娘「玉さん」を三十円[22]という金額で日本妻として迎えた。同棲は三ヶ月ほどであった。ホロウハ曰く、タマさんは蒐集物に全く興味がなく、欠伸をしながら退屈をしていた。彼女との三ヶ月にわたる大阪での生活を経て、ホロウハは鎌倉の南部榮太郎邸を訪ね、チェコ人としてはじめて富士山に登山したという。[23]東京の向島で花見を体験するなど、八ヶ月を数える在日滞在を終え、帰国した。ホンコポヴァー氏によると、ホロウハが付けていた蒐集リストは一九〇七年までの間に三三五三点にのぼり、そのうち二〇〇〇点は日本の美術品や土産品、七五〇点は日本の書物である。[24]ホロウハが最初の在日滞在から持ち帰った書物に関する図録は、一九九八年にプラハ国立美術館から出版されたホンコポヴァー氏、小池正胤氏とレズネル氏共編：*Japanese Illustrated Books and Manuscripts from the National Gallery in Prague*（英日文あり）がある。帰国後、ホロウハは著書を次々と生みだす。

ホロウハが書いた本は、全て日本を題材にしている。前述した『嵐の中のサクラ』に続いて『洪水』（*Zátopa*、一九〇六年）、『日本の回想』（*Vzpomínky na Japonsko*, 一九〇八年）、『死神の接吻』（*Polibky smrti*, 一九一三年）、『私のお菊さん』（*Moje "Paní Chrysanthema"*, 一九一九年）、今回取上げる『恐怖の東屋』（*Pavilon hrůzy*, 一九二〇年）、『匿名の手紙』（*Dopisy neznámého*, 一九二三年）がある。なお、『私のお菊さん』は、元々『日本の回想』に短編的に掲載されている。ホロウハは自らの短編をロティに捧げながらも、『私のお菊さん』はロティの『お菊さん』への挑戦でもある。ロティの結果として日本的なるものの批判に対して、ホロウハは日本をより理解しようとしている。最終的に、ホロウハも「ロティ以上奥には進む事が出来なかった」という結果になるが、ロティのような嫌悪感と誤解はホロウハの作品には見られない。

一九〇八年五月から十月の間、プラハで商業会議所記念博覧会が開催された際、ホロウハは「日本茶店」を自ら設計し、建築家ヤン・コチェラ[25]にこれを見せ建築協力をしてもらった。一九〇九年にプラハの中心地、ヴァーツラフ広場のパラーツ・ルツェルナの地下へと移店し、ホロウハは、弟カレルと共に一九一五年まで経営した。[26]第一次世界大戦後に、ホロウハはヴァーツラフ広場に現存する有名なキャバレー「アルハンブラ」の株主として収入を得ていたことがホンコポヴァー氏の発表[27]からわかった。シュメイカル著『日本を愛す男～ヨエ・ホロウハの三つの愛』に於いて、ホロウハは、一九一一年までヤマグチ・トクコという日本人女優を介護したという記述[28]もある。ホロウハは、ハンブルクで当時刊行されていた *Ostasien*（「東アジア」）雑誌の編集長オ

イカワから、夫と共にヨーロッパを巡業するヤマグチ・トクコが、ベルリンのPassage-Theatreで奈落へ転落した際に傷を負ったという紹介状をもらっている。プラハに保養に来たヤマグチ・トクコはホロウハ曰く「日本語しか話せなかったので彼女のプラハ滞在は私のためになされたもののようであった。日本演劇の謎を解き明かしてくれて、また日本の民話など、ヨーロッパではなかなか知る事のできないことをいっぱい教えてくれた」と記述している。

ホロウハは第一次世界大戦中に執筆し、蒐集を整理するなど、独学を続ける。戦後に日本を経由して帰国したチェコスロヴァキア軍団の兵隊たちと交流し、自らの蒐集活動を深める。一九二四年にプラハ郊外のロストキで「ヴィラ・サクラ」と名付けたホロウハ邸を建て、日本庭園を造園してもらうが、一九二六年に手放し、プラハのスミーホフ区ナ・フジェベンカーフの一軒屋へ引っ越す。「ヴィラ・サクラ」は後に人気のレストランになった。一九二九年にFrantišek Illich（フランチシェック イリフ）の設計によってその隣接する土地に四階建ての豪華建物「ヴィラ・ヨコハマ」が築かれ、保養施設として人気を集めていた。

一九二四年にホロウハは弟カレルと一緒にアフリカへの旅をして、一九二六年五月から十二月にかけての二回目の来日を実現する。日本に到着する前に上海（二週間滞在）、香港（一週間）。そして、神戸（二週間）、横浜、東京（一ヶ月）、広島（三週間）、京都（二ヶ月強）、再び東京（一ヶ月）へ移動して蒐集活動を行う。帰路はカナダを経由した。ホロウハは、注へ自らの最大の夢、日本人女性を妻にしチェコへ同行することをもはや叶えることが出来なかった。一九三四年に、チェコ写真界の大家、ドゥルチコル[29]のスタジオで五十三歳を迎えたホロウハは、自らの全裸写真を依頼し数枚撮ってもらった。この事実を、今年の七月に東京で出会ったニューヨーク在住のチェコ出身美術史家ヤロスラフ・アンジェル氏から教えられた。晩年のホロウハの心境を知る上で貴重な情報であろう。なお、二回目の在日滞在から、袋綴じ特装本として出版された『日本の子供たちのおとぎ話』(*Pohádky japonských dětí*, 一九二六年)、『微笑みを売る女たち』(*Prodavačky úsměvů*, 一九二九年)、『神と鬼に囲まれて』(*Mezi bohy a démony*, 一九二九年)、『日本の女性たち』(Japonečky, 一九三一年)、『寺が千棟のある街』(*Město tisíce chrámů*)が生まれ、後に中国を題材にした『愛の園』(*Zahrada lásky*)[30]が出版された。なお、ホウロハは『愛の園』の映画化を企画した[31]が実現しなかった。

ホロウハは一九二七年からヨーロッパ各地の美術館をまわり、顧問を務める。『ヨエ・ホロウハ叢書』(*Soubor spisů Joe Hloucky*, 八冊、一九二九～三六年、未完成)、『北斎』(*Hokusai*, 一九四九年)[32]、『ニッポン』(*Nippon*, 遺産で原稿のみ、未完成・未出版)が彼の最後の著作となった。

ヨエ・ホロウハは正に日本を愛する人物だった。一生を日本にのみ捧げ、一度も正式な結婚をせず、一九五七年六月十三日に享年七六歳で永眠した。第二時世界大戦中にプラハの文部啓蒙省に隠蔽した美術コレクションは、解放後、無傷でもどったものの、晩年、一九四八年に起こった共産党クーデターがもたらした恐怖政治の時期と他の国民と同様に対面せざるを得なかった。億万長者税を課され、豪邸から一般のアパートへと引っ越しをやむなくされ、また通貨改革に莫大な財産を奪われた。

ホロウハの執筆によるセンチメンタルな物語の背景には日本通の知識を感じることが出来る。二〇世紀前半のチェコにおいて日本を知らしめたことというホロウハの貢献は大きく評価したい。また、日本を題材に蒐集活動家としてチェコで一番大きな日本美術コレクションを築いたことで彼を超えたものはないだろう。

三　『恐怖の東屋』

『オユヴァイナリダイミョウジン』は一九二〇年にプラハ、スミーホフ区にあったヤン・コチーク（Jan Kotík）出版社から発行された、ヨエ・ホロウハ著の『恐怖の東屋』(チェコ語題：*Pavilon hrůzy*)に収録されている。興味深いことに、そのまま日本語を音声的にローマ字に直して*O-Juva-Inari-Daimjodžin*と標題されている。また、主人公であるお岩は本来ならOiwaならぬO-Juva（オユヴァ）と音便化されている。当時のホロウハにはこう聞こえただろう。『オユヴァイナリダイミョウジン』への小生の思いが蘇えったのは、二〇〇三年三月にプラハに一時帰国した時だった。小生は長年にわたって探し求めていた『恐怖の東屋』の有無を探る際、プラハのナープルステク博物館に一冊が所蔵されていることを同博物館の学芸員、アリツェ・クレメロヴァー氏に教えられた。しかも、小生が後に手に入れた蔵書とは違う、ホロウハの友人への、いわゆる配り本（特装本）と思われるものであった。

小生の手元にある『恐怖の東屋』は百三十二頁、一七二×一二七ミリのものであり、その装丁と挿絵（図5）を手掛けたのは、チェコの画家であったオタカル・シュターフル（Otakar Štáfl）である。シュターフルはチェコのヴィソチナ地方のハヴリーチュクーフ・ブロット、木細工職人の家で一八八四年に生まれ、高等学校を自ら中退した後、一九〇三年からプラハに移り、フェルディナント・エンゲルミュレルの門下として風景画を学んだ。早く日本の版画に魅せられ、その手法を自らの制作に取り入れた。なお、その作風にはアール・ヌーヴォーの風を吹かせ、一方、一九二〇年代頃に勃発したチェコのアヴァンギャルド派とは異なる道を歩んだ。日本趣味的文学をはじめとする所謂エキゾチック風味の出版物（旅行記）や青年向けSF小説、おとぎ噺などの挿絵師として活躍したシュターフルは妻とともに、一九四五年二月十四日にプラハ空襲の犠牲となった。アトリエの戦災で消滅されなかった一部は現在、ハヴリーチ

ユクーフ・ブロット市のシュターフル記念館に保存されている。なお、シュターフルとホロウハとの協力のきっかけは、一九一二年から一三年にみられる。ホロウハは自らの著書、『死神の接吻』(*Polibky smrti*)のため、チェコの保守的な嗜好に合わせ、日本の挿絵技術をそのまま模写せずに描いてくれる画家を募集したところ、シュターフルを紹介された。[33] こうして作家ホロウハと画家シュターフルの協力が始まった。シュターフルはまた、ホロウハのコレクションに強いインスピレーションを受け、ホロウハの他の表紙絵や挿絵を担当した。[34]『恐怖の東屋』のために、頁の全面を覆う絵を七枚と、小さな挿絵を六六枚も手掛けた。口絵として龍や、地に三つ扇の家紋を散らせ、燭台を描いた。別の口絵には草花を縁に、「すみは餓鬼にすらせ／筆ハ鬼にとらせよ」[35]という諺が日本語で書かれている。垂直に書かれた日本語の下に、水平にチェコ語(ローマ字)による読み方とチェコ語訳が書かれている。この口絵を更に捲ると、左膝をついた男が背負う大きな鏡には「時は明治、十月の某深夜の頃、東京の赤坂の東屋にてムラカミ・サゴロウ氏が友達の子息七人を相手に、恐怖及び臆病を放棄させんと語った七短編である」との文章がチェコ語で書かれている。

なお、ナープルステク博物館が所蔵している『恐怖の東屋』は、特装本で配り本として友人に贈呈していた本であろう。その装丁は一般に売られたものと違い、豪華である。驚くことに、その表紙にホロウハは日本で蒐集しチェコに持ち帰ったであろうと思われる浮世絵を二枚使用している。この絵については、表(図3)は落合芳幾[36]の「百物語・雨女」で、裏(図4)は長澤蘆雪[37]の幽霊画だと思われる。恐らく、ホロウハ自身によって選ばれた絵だろう。表の表紙の幽霊は筋が浮き出た顔で、口を大きく開け、歯に鉄漿をかけている。薄い髪は撫肩にかかり、痩せこけた胸に肋骨があらわになることによって凄味が増されている。早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵の落合芳幾と落款された図と比較すると、差異が感じられない。「百もの語」「一六」の文字が削り取られ、原図をもとにあらたに模写されたものと思われる。また、「雨女」と書かれてある個所の左に著者名と標題が書かれている。なお、この図は、もともと北斎の傑作怪奇図「百物語」シリーズ(一八三〇年頃)を芳幾が模写したものである。[38] 裏表紙の図は、眼を左上に睨み、大きな歯を食い縛ってみせ、尖った爪を伸ばしたひょろひょろの手を胸元の前に痙攣したかのようにみせている幽霊である。図の左側に「蘆雪画」の署名に「芳幾模写」という落款がある。これも原図をもとにあらたに模写されたものであろう。

表紙の基になった絵をプラハで探ってみた。ホロウハが蒐集したものは生前に一九五四年にプラハ国立美術館、ナープルステック博物館それぞれに寄付され、その代価として、国から年金を支給された。国際日本文化研究センターは「海外日本美術調査プロジェクト」として『ナープルステク博物館所蔵日本美術品図録』と『プラハ国立美術館所蔵日本美術品図録』とを一九九四年に発行したが、『恐怖の東屋』に使われた二枚はその中に見当たらない。ホロウハが生前、ベルリンなどで行なわれたオークション[39]で売りさばいたか、友人に贈ったのだろうか。小生はこの絵の情報を今のところ得ていない。

ホロウハは、何故に百物語をテーマにした図を選択しただろうか。他の著書に蒐集した広重などの浮世絵を高度な印刷技術を使って紹介しているものもある。しかし、百物語の図は『恐怖の東屋』の表紙に使われたこの二枚のみである。ホロウハがチェコに持ちかえったであろう異界をテーマに描かれた作品のうち、ナープルステック博物館に歌川国貞二代、歌川貞秀、都遊の合作「江戸花名勝合」のうち「四ツ谷」、歌川豊国初代の尾上菊五郎・岩井粂三郎の幽霊、猿雀の市川米蔵のお岩、春好斎北洲の尾上菊五郎の幽霊、歌川国芳の「昔ばなしの戯　猫又年をこへて古寺に怪をなす図」、掛軸としては桃湖の幽霊図などがあり、全長三〇センチ程の人魚(猿の首に魚の胴体に鳥の足)も所蔵され、実に様々であるとクレメロヴァー氏から教えられたが、件の図だけは不明のままである。

『恐怖の東屋』の冒頭に、「一九某年十月六日、東京にて」と書かれている。当日、ホウロハと思われる本書の主人公は帝国病院の医師であるムラカミ・ゼンゾウ(原文チェコ語、ローマ字)から、明日(十月七日)に行われる予定の「オヒマチ」の会へと誘われた。昔話を語ってくれたのは、ゼンゾウの父上である、赤坂在住のムラカミ・サゴロウだった。主人公は八才から十二才の青年たち七人と一緒に、茶の湯用の東屋に招かれ、七つの話に耳を澄ます。話が終わる毎に、青年一人一人は暗い庭園を通って、家の離れにある一室に置かれた灯台の灯心を切り、勇気のしるしとして持って帰るという設定になっている。なお、日待とは、人々が集まり、前夜から潔斎して一夜を眠らず、日の出を待って拝む行事。普通、正月、五月、九月の三、一三、一七、二三、二七日、又は吉日を選んで行うというが、毎月とも、正月一五日と一〇月一五日に行うともいい、一定しない。[40] 日本民俗大事典[41]によると、日待とは、特定の日に集まったり、或いは篭りをしたりすること。講が組織されて行なわれていることが多い。特に庚申[42]、甲子、巳の日などに集まる日待はよくしられている。いくつかの禁忌があり、例えば、日待に出席するものは出席前に必ず風呂に入浴すること、庚申の夜は男女同衾をしてはならないこと、精進料理を食べることなどがある。ホロウハは日待の形式を取り入れながら、百物語——数人が集まって怪談を語り、百の灯心を入れてともし、一つの話が終わる毎に一筋の灯心を消していく——という形式を自ら解釈しながら紹介している。ホロウハによるオヒマチは次ぎのように説明されている。

「このオヒマチは我が国では全く知られていない習俗である。侍の子供たちは古代のスパルタ人のように教育された。この習俗は日本の中世から、今日に伝承されてき

たものである。その昔、決められた日の深夜に幾人かの青年が先生の下に集い、離れた寂しい一室で、先生に語られた怪談噺に耳を澄ませた。怪談噺の休憩になると、若き聴衆は墓所や処刑場、幽霊屋敷と噂された家に行かされ、目的地に達した標に、事前に決められたものを持ち帰らなければならなかった。維新の際に武士階級が廃止されると、これらの「恐怖の宵」は、内気と臆病を放棄するために、愛国心のある家庭に於いて、さほど厳しくない形で残された。[43]」

ホロウハは「日待」を題材に、七つの小説に纏めている。その内容を簡単に紹介しておきたい。

一）「盗まれし塔婆」（UKRADENÁ TOBA）……一八頁

江戸時代文政のころ、侍たちは京の南禅寺の近くで日待を催し、一人は黒谷へ敵の墓の塔婆を取りに行かせられ、敵の幽霊に追われて死ぬ。

二）「ある暗き夜の出来事」（HISTORIE JEDNÉ TMAVÉ NOCI）……二六頁

上杉謙信は刀磨ぎ師イトウ・ゼニエモンに名刀正宗を修理に出す。イトウ・ゼニエモンは陰謀者によって銘刀を奪われ自決する。虚無僧に身をやつした娘スミは父の仇を討って名刀を謙信に返し、自ら入水して果てた。

三）「婚礼」（SVATBA）……四六頁

貧乏暮らしのチョウマツの娘ユキはその主人の息子と恋愛結婚をし、嫁入り道具の金貨まで贈られる。ヤマグチヤ・セイベという呉服屋で婚礼衣装や蒲団などを買った。ある日、日干しをした道具は突然の豪雨にあい、色が落ちてしまう。呉服屋に騙されたことを知って、親類に苛められたユキは川に身を投げた。川からすくい上げられたユキは死ぬ間際に娘を産んだ。何も知らされていなかった娘は吉原の大文字楼に売られ、タカオ太夫になった。ヤマグチヤの息子セイゾウに出会い、許されない愛は破綻に向かった。タカオは自害、何も知らないセイゾウがフジエという女性と結婚すると、その夜、タカオは幽霊となって現れる。タカオの死を知ったセイゾウは自決、その妻も自殺する。呪いを掛けられたヤマグチヤに仇が打たれた。

四）「坊主の首」（BONZOVA HLAVA）[44]……七二頁

尾張大名の侍、ウショウベン（右少弁）トシトモは剣豪、酒好き、そして囲碁の名手として知られた。ある日、狩りに出て鹿を追うところ、坊主に出会った。囲碁に誘われたが、負けてしまった。二回も三回も。そして、激怒のあまりに坊主の首をねた。その時から碁盤を見る度に刎ねられた首が現れ、ウショウベンは苦しまれた。大名と囲碁に誘われたウショウベンは碁盤を持って来ると、そこに腐朽した坊主の首があった。坊主の殺人が露頭したウショウベンは無数の矢で非業な死をとげた。

五）「仏陀の涙」（BUDDHOVY SLZY）……八三頁

サヘイは母の希望により剃髪し光明寺に入った。お寺の奥の方にあった古い仏堂の仏像に心を奪われた。さびれた仏像をきれいにし、毎日花を供えた。ある日、仏像のダイヤモンドで作られた眼を奪いに来た他の弟子に出合い、盗人を追い払う。サヘイの母は死に際に大家に家賃の代わりに渡した数珠を手に巻いて葬られたいといった。大家に数珠を返すまいと言われたサヘイは仏像の前で懺悔して泣き崩れた。すると、仏像の手が動き出し、仏像の目からあふれ出る涙をぬぐった。滴った仏像の涙は小石に化し、サヘイはそれを持って数珠と交換しようと思った。どこで拾ったかと聞かれたサヘイは素直に答えた。しかし、数珠を返してもらえなかった。大家が仏像の涙を取ろうとすると、仏像の手に遮られ、大家は死んだ。大家の亡骸の袂から数珠が落ちてきた。

六）「オユヴァイナリダイミョウジン」（O-JUVA-INARI-DAIMJODZIN）……九五頁

本稿の付録として拙訳を参照。

七）「青い燈籠」（MODRÁ SVÍTILNA）……百十七頁

大名の奥方がある夜に霧に覆われた西の沼で青い燈籠の光を目にし、欲しくなった。大名はサカモト・コマジロウに、燈籠を持って来るようにと命令した。サカモトは燈籠の持主キヨナガを矢で射殺し燈籠を奪った。キヨナガの訪れを待っていたタミコは彼を三日も探し、ようやく浮き上がった遺体を発見した。愛しい人を抱き、一緒に沼へと沈んだ。その夜から、青い燈籠の光が消え、奥方は濡れた服の女性が来る夢をみるようになった。女性は恋人の燈籠を探していると言った。それ以来、燈籠の光を奪いに来る幽霊が現れ、射られたサカモトの矢で下女を殺して消える。サカモトは犯人とされ自ら首を刎ねて死ぬ。後にタミコの幽霊は奥方の前に現れ、全てを解き明かす。奥方は燈籠を二人がなくなった沼の柳に供え、剃髪して尼となった。

四　ホロウハと『四谷怪談』

ホロウハが実際に『四谷怪談』を観劇したかは、今の所不明である。『恐怖の東屋』は一九二〇年に出版された為、もし観たと仮定するならば、一九〇六（明治三九）年三月初旬から八月初旬までの間になる。上演資料集『東海道四谷怪談』[45]によると、東京台東区千束町にあった宮戸座の八月興行に『雨夜鐘四谷怪談』が出ている。ホウロハが、これを見たかどうかは不明である。彼の著書に歌舞伎の観劇について記述[xlvi]があるものの、演目は指定されていないので、断定は出来ない。

また、ホロウハが題材をどこから得たかは今のところ不明であるが[46]『オユヴァイナリダイミョウジン』は、冒頭に前述したチェコで紹介されて来た三つの『四谷怪談』のうち、一番恐怖に戦かせてくれる話である。

『於岩稲荷来由書上』[47]に記されている「重ヰ疱瘡相煩ひ片眼盲シ勝れて醜婦」や、『四谷雑談集』[48]にある「この娘の性質はいたって悪かったので、誰一人嫁にしようという

人もなく、そのうち二十一歳の春に疱瘡を煩い（省略）ひどいあとがのこって、顔は渋紙のようにざらざらになり、髪は年にも似ず白髪混じりに縮み上がって枯野の薄のようになり、声はなまって狼は友を呼ぶような音になり、腰がまがって松の枯木のようで、その上片目がつぶれて、（省略）その見苦しさはたとえるものではないほどであった」とあるに対し、ホロウハのお岩（オユヴァ）は貞節で、忠実な女性であり、夫イエモンに子供を与えることに使命と義務を感じている。醜くなるのは、鶴屋南北作『東海道四谷怪談』伊右衛門浪宅の場と同様、薬を飲んでからである。ホロウハはその様子を「血は彼女の血管を一際早く循環し、錆けた鉄みたいに熱かった。彼女の口が脹らみ（省略）髪の毛の半分を失ってしまった。そして、脹らんだ歯茎では歯もはや歯も抜けることをも覚悟した」と書いている。鶴屋南北の傑作とはやや違い、創作的な個所もあるが、主題はいかされている。すなわち、お岩の髪梳きこそないが、顔に痣ができ、眼が飛び出し、髪の毛が抜けて、爪がはがれる、毒薬を飲まされてお岩が醜く変貌するといった怪奇現象がこの小説でも魅力となっている。特に、爪が剥がされる部分「枝から熟した果実であるかのように落ちていった」の描写などは傑出していると思う。

お岩が伊右衛門の子を産む設定も、『於岩稲荷来由書上』や『四谷雑談集』などの実説には見られない。これも『東海道四谷怪談』に拠るものである。伊右衛門が、赤子を抱くと石の地蔵になる趣向も、同じく『東海道四谷怪談』を踏襲したものだが、『今昔物語』（二七、第四十三）などで知られる「うぶめ」の習俗伝承を踏まえて脚色されているところにホロウハの特色を見るべきなのあろう。

また、『於岩稲荷来由書上』、『四谷雑談集』、そして『東海道四谷怪談』と相違ある結末――イエモンは改悛して剃髪することによってお宮は建立される。この結末はホロウハの創作と思われる。日本をこよなく愛した、ジャポニズムに憧れたホロウハの、これが『四谷怪談』の受け止め方だった。

付録

ヨエ・ホロウハ著

オ・ユヴァ・イナリ・ダイミョウジン

ペトル・ホリー訳

主人の方を恭み深い眼指で見て、オユヴァが言った。

「男の子が生まれることを信じております。いや、男の子を生むに違いないのです。この私が三十路になって、旦那様に相続人を差し上げられるなんて、この上ない喜びにございます。」

と彼女の声は喜び、そして愛で震えていた。

タミヤイエモンは、無上の幸福で微笑んだが、何も言わなかった。子供をもうける、男の子の子孫に恵まれるという希望をとっくに諦めていた。彼に名を継ぐべき相続人をなかなか献げる事が出来ないでいる妻が故に、若いメカケでも家に呼ぶことさえ考えていた。今は、妻の予測、そして喜びに満足していた彼である……。オユヴァは静かで貞女だった。自らの懐妊を計り知れない家宝であるかのごとく大事にしていた。一秒一秒、旦那様に満足してもらえるよう、貞節な愛を育んでいた。彼女の素朴で空虚な人生は今、新しい、そして重大な出来事で満たされることだろう。母になることはそういう事である。彼女は、健康で強い男の子を生むことが誇りであることを知っていた。他の若い女を振りかえったり、芸者と遊ぶことを好む主人だがきっと喜んでくれるだろうと、彼女は嬉しくてたまらなかった。

常から女性にもてはやされた美男、怖れを知らない、なかなかの腕前の剣士タミヤイエモンは近頃、仙台の国の大名に仕えるという良い職を辞し、今は収入も職もない浪人の身の上であった。彼が東京をさ迷っている間、善良で静かな妻のオユヴァは、彼が自分の所に帰るまでの時間を数えるばかりだった。彼女は、主人が物のない生活へと彼女を陥らせたことで非難をしなかったし、貧苦に近い暮しをさせ、そして貧乏な地区に居を構わなければならないようにさせたことで嘆いてもいなかった。貧乏に陥り、オユヴァが、亡き親から譲られた愛着のある家宝を次々と売り飛ばさざるを得ない時や、日本橋から貧乏人が棲んでいる四谷へ引っ越しせざるを得なかった時も、彼女は悲嘆に暮れることがなかった。主人に欠点があっても、彼女は、彼に対して大きく、忠実な愛を抱いているのだった。

彼女は苦しみ、そして黙っていた。タミヤは自らの気質を、息子の誕生によって変える、武士という職に再び戻る、そして家族はまた豊かになる、と彼女は信じていた。

太陽と喜びが溢れる春がやってきたものの、家族の苦しい状態は、以前と同じであった。貧窮そのものが彼らの家に居座りそうになり、家族の一員になる事を迫っていた。初めて生まれる子が、このように悲しい日々の中で世の光を見ると思うと、彼女はくやしくてたまらなかった。

飛鳥山と向島で桜が咲き乱れた。誰もが桜をほめたたえに行って、どんなに悲しい顔でも楽しくなり、どんなにおとなしい唇でも桜の美しさでよみがえった。

ただオユヴァだけは家から出かけなかった。子供の誕生に備えて、留守中の主人を思い巡らしながら貧苦に陥った家庭で家事をしていた。タミヤイエモンは町を一人で、ただあてもなく放浪していた。張り裂けた彼の心の内は、どこへ行っても、家にいる静かな真心を尽くした妻のところでさえ、平安を見い出すことがなかった。彼は、

彼女の前で自らの貧しい、絶望的な立場を恥じていた。妻を冷淡な目で見はじめていた。こうして考えるうちに、彼は、隅田川岸にある満開の桜の並木に着き、その美しさをほめたたえる群衆に合流した。そこにあった色と音の混沌、喜びと感嘆の声の渦巻によって、彼の思いは静穏になった。人生で、一度も泪を流したことのないようにみえるほど美しい微笑みを見せる少女たち、以前に何の心配も掛けられた事のないような、輝いている笑顔の親たちの姿が彼の目に映っていた。タミヤが注目したのは、少し離れたところに座っていた数人の集まりだった。サムライ一人と女の子四人。彼らは、木の下、桜の満開の梢の下に腰を下ろし、金銀の細い紙に句を書いて、これらを花々の間に、枝に吊り下げて遊んでいた。句は美しく、洗練され、そして繊細に紙に書かれたのだった。春、太陽、桜花、鶯のさえずりなどをほめたたえたものだった。句を読み上げる女の子たちの歌声にタミヤは耳を済ませていた。

タミヤを見掛けたサムライは、彼を招いた。そして、タミヤイエモンに自らを紹介した。日本橋に居を構えた、将軍家に職を持つお金持ちのサムライのイトウジュウベイであった。美しき娘のツユとその三人の女友だちも紹介した。

皆は、誰にも邪魔されずに遊んでいた。

そして、女の子たちは再び、春、太陽を詠った句を書き、これらを咲き乱れる桜の枝に吊るした。タミヤイエモンは彼女たちを手伝った。彼は機転のきく、詩にも優れた人物で、やがて、自らの詩で皆の称嘆を得ることができた。艶やかなツヤは彼の句に、タミヤイエモンは彼女の美しさに感嘆した。

日が暮れた。桜の花はほとんど見えなかった。そこら中に、群衆がブンブンという音で沸き上がり、提灯のともし火がしみ出ていた。

タミヤイエモンは新しき友に別れを告げた。「何と美しい、何と美しい」と帰りながら、もの思いに耽ってつぶやいた。

貧乏の町、四谷、静かで忠実な妻のところへ帰っていった。彼はもしや職探しにでも出かけていたのではと思い、妻は彼を嬉しい気持ちで迎えた。

「旦那様、熱いお茶をどうぞ。お体を温めて下さいませ。まだ春先で、夜はまだ涼しいのです。」と主人の前に畳に熱い飲み物を置きながら言った。

しかしイエモンは何も言わなかった。すでに萎れていく妻を見ながら、サムライであるイトウジュウベイの美しき娘ツユを思い出していた。

彼は、額を厳しい現実でしかめた。

善良なる妻オユヴァには、主人の突然の気持ちの変化がわからなかった。ただ「願わくば、早く子供を」と感情を込めてそっと独り言を言った。

明くる日に、イエモンは、再び向島へ桜の花見に出かけた。きっと、自らの切望の的、美しいツユに再び逢えることを信じていた。彼女はまた父とともに参加していた。

今回は川に浮かぶ、提灯、花と布の窓掛で飾られた船に乗っていた。彼らは、一緒に船に乗るようにとイエモンを誘った。心踊る一日であった。春の太陽は血を温め、そして欲望をすべて際立たせた。日が暮れるや否や、イエモンは美しきツユに永久(とこしえ)の愛と忠実を誓った。そして、彼女もまた貞節な愛の誓いを立てた。

イエモンは彼女に惚れ、変わった心境で家へ帰って行った。すべては暗く、そして貧しく、家は空虚で、妻は素朴、そして悲しく、と彼の目に写っていた。

おそらく彼は、不機嫌で、いらだっていたであろう。

簡素な食事をとり、煙草の気分でもなく、お茶も口にしなかった。

そして、家と心配に耽る妻を離れ、自らの若き恋人を思い出しながら夜中町の道を放浪して歩くばかりだった。

将軍家のサムライの娘ツユもまた、イエモンに死ぬほど惚れてしまった。

彼女の父はイエモンを、その真っ直ぐな、軍人的な気質のため、また知る人ぞ知る剣術の腕前のために好きになった。これが故に我が娘の愛を祝福した。

愛しいイエモンが、既に結婚していると知った美しきツユの憂えは、想像に価しないものだった。

「私はメカケになりたくない、それより死んだ方がましです。」

と叫びながら日も夜も泣き崩れた。

そして、イエモンの事を一層愛するようになった。父に慰められても無駄だった。

明くる日にイエモンは彼らの家に来た時、涙を流している女子に言って喜ばせた。

「我妻が、もし男の子を産んでくれなければ、離縁するつもりだ。そして貴方だけが私の愛しき婦人へとなるのだ」

「しかし、もし男の子であれば?どうなりますか。」

と彼女の悲しみに耽った涙ぐむ眼が聞いていた。

しかし、愛しい人の請け合いの言葉は彼女をやや静めた。

それから、固い心の持主であった日和見主義者のお金持ち、彼女の父は、我が娘の幸せの生きた障害物を、いかにして始末をつけるべきかを考えたのだった。

明くる日は、知られた膏薬売りと藪医者を、その四谷の掘建て小屋まで訪ねた。二人きりになって、紙で作られた壁の後ろに誰も立ち聞きしていないのを確かめてから、来た旨を打ち明けた。

「誰かを処分しなければならないのだ、お前!浪人、剣士のタミヤイエモンの妻をだぞ!ちょうど良い時だ!出産を時期に!男が生まれようとも、女子が生まれようとも構わん!タミヤの了解があるさ!金も持って来た!」

と言って、卑しい男に金貨でいっぱいの絹袋を渡した。

しかし、タミヤの了解どころか、このような下心について、何も知るよしもなかっ

た！

念願の子供が世の光を見る日が早く近づいていた。

主人に辛くされつつも、優しい言葉や微笑み一つも得られなかったとしても、オユヴァは喜びの日々を過ごしていた。

彼女は今、長い年月を経て、女性として、そして妻としての義務を果たすべく、不機嫌な主人に男の子を与えることを喜びに思った。

「嗚呼、私はなんて幸せなのでしょう、なんて幸せなのでしょう」

と、自らの孤独さに繰り返していた。

そう思ううちに、小さな楓や松が風になびかされる、小川がさらさらと流れる庭を眺め、我が子が、これらすべてを見て、どれだけ喜ぶだろうかと思い巡らした。

一方、タミヤイエモンは帰宅を避けるようになった。春の暖かい日をツユとその父の一行と過ごしていた。彼の愛は、日に日に成長していった。善良で忠実な妻オユヴァの事を忘れていった。

そして、オユヴァが横たわった。

子供が生まれるのを待って、節約し、食糧不足で体が弱っていた。

タミヤは彼女を、その恐怖や痛みのうちに残した。こんな時でさえ、恋人との出会いを絶つことがなかった。哀れな女性の世話を貧しい隣人がするようになった。

夕方に子供が生まれた。男の子だった。健康で、美しい男の子だった！オユヴァは喜びのあまりに気が抜けそうだった。

その夜は力を写えてくれる健全な眠りに耽った。明くる朝、四谷から膏薬売りのチクワンが、腹の黒い人ならではの、忍び寄る歩き方でやってきた。オユヴァは醜(みにく)い男にびっくりした。

「ご主人様のイエモン、タミヤイエモンに頼まれて来ました。貴方を強くする薬を持って参りました！」

と言って、小さな土瓶とお猪口を差し出し、女性がしばしば出産時期に使うサフランの薬に似たような、紅の液体でお猪口をいっぱいにした。病人にそれを渡すときに、じっと彼女の方を見詰めた。

薬を信頼したオユヴァはひたむきに飲んだ。

「直に良くなる、完全に良くなるよ」

と言っただけで、やがて薬売りは病人と別れた。

我が子の傍に無理して再び眠りについた。

彼女は日が暮れ行く時刻に目を覚ました。空腹の赤ん坊は泣いていた。

彼女は頭痛で、体が朦朧(もうろう)としていた。

赤ん坊に母乳を飲ませ、蚊帳の中で蒲団の上に寝かせ、その傍に横になった。主人が帰るのを待っていた。　緑色の蚊帳を飛び交う蚊がピーピーと音を立てていた。

地に飢えた生物のブンブンと立てる音の他に何も聞こえなかった。家は空虚で静けさに満ちていた。

その晩遅く、イエモンは帰ってきた。

二日間も留守にした主人を迎えんとオユヴァは蒲団の上でよろよろと体を起こした。

「旦那様、御覧くださいませ！お子様です！息子です、貴方様の息子です！」

と喜びに満ちた、ふらふらした声で言った。

タミヤイエモンは部屋の片隅に立ち止って、子供の方にうとうとしく眼をやった。

「息子か、本当か」

と、彼の思いは今、日本橋の恋人のところにあることを打ち明かす、喜びのない、濃淡のない声で言った。

静かに立ったまま、母と子を見ていた。近づかず、子供を抱擁せず、その病気をわずらう、貧弱な母を楽しもうともしなかった。

オユヴァの眼には、イエモンは行灯(ランプ)のどんよりした光で大きく、硬直で、幽霊に似ているかのように写っていた。

疲れて、オユヴァは再び寝床に横たわった。赤ん坊は目覚めて泣き出した。

タミヤイエモンは一言も言わずに家を出た……

明くる日に、オユヴァは全身の苦痛で目が覚めた。頭を重たく感じ、まるで鉄で出来ているように思えた。彼女の細い首で支えられないほどだった。

主人は夜に家に帰らなかった。その床は空だった。

雲って、物寂しい一日だった。

彼女は寝床から体を起こし、家に誰かが入る前に、その身形(みなり)を整えんとした。近くに落ちていた鉄の鏡にかろうじて手を伸ばした。しかし、鏡の中に写った自分の顔を見た瞬間びっくり仰天！何かの妙な病で脹らんだその顔中は、醜い赤と青の痣で覆われていたのだ。彼女の、本来は美しく、貞節な眼はいつもより大きく、むくんだ瞼から出ようとするように見えた。彼女は自分自身に脅えさせられてしまうがなかった。

せめて容貌を少しでも拵えんとして、彼女は乱れた髪の毛を梳こうとした。

しかし、櫛を髪の毛に通したその時に、髪の毛の房はその手に残ってしまった。自分の目を疑うかごとく、二回目に梳くと、髪の毛の房が次ぎから次ぎへと頭から抜けていった。

恐怖に征服された彼女は再び寝床に横たわり、苦い涙を流していた。今となって、自らの恐ろしい病を実感していた。血は彼女の血管を一際早く循環し、錆けた鉄みた

いに熱かった。彼女の口が脹らみ、歯が痛くなった。
もしやこれは出産の余波でもあったか。
もしや、男の子誕生成就の常なる願いで神々を怒らせてしまったのではないか。
彼女が陥ってしまったこの醜き状態の罪科は彼女自身にあったのか。
イエモンは何を言うか、彼女を襲った変貌に、いかにして驚かされてしまうかを思う余裕もなかった。思うこと自体が出来なくなっていた。寝床に横たわったまま泣いていただけであった。
その傍に、堅苦しく息をしていた赤ん坊が眠っていた。
そうする間、静けさに満ちた長い時間が過ぎていった。オユヴァは激しい苦痛を感じた。その渇いた唇を潤す水はどこにもなかった。医者の助けを呼んでくれる者も近くにいなかった。彼女の痛みが激しさを増していった。毒殺の膏薬売りの毒はよく効くものだった。
その憂鬱で淋しい午後の間、彼女は自らの美しい髪の毛の半分を失ってしまった。そして、脹らんだ歯茎ではもはや歯も抜けることをも覚悟した。絶望した彼女は眠っている赤ん坊を見ているうちに、その顔に、まだ幽かではあったが、自分の顔を醜くしたあの不可思議な痣と同じようなものがしみ出る気配がした。
もしや、病は母乳で赤ん坊に伝染したのではないだろうか。
どうしょうもない彼女は仏壇を思い出し、赤ん坊を授けてくれた神々、かねて彼女の願いを聞いてくれた神々を思い出した。そして、彼女は神々に再び助けの願いを立てようとした。
蚊帳の中の寝床を離れたものの、身体を起こす力がなかった故、もはや人間とは思えない姿で、先祖を弔う仏壇が金箔できらきらする部屋の暗い片隅の前へ膝で這っていった。
その前で畳に泣き崩れ、自らの悲痛そして失望を、生気のない唇で囁くような祈りに託して、畳を涙で濡らした。
充分祈って、畳を涙で濡らしてからかろうじて蚊帳の中に入った。
それから、生気なく横たわり、歯一個一個を、病をわずらった歯茎から取り出していた。
恐ろしき運命に鈍くその身を任せてただ横たわると、彼女は家の玄関先で誰かの足音を聞いた。
すると部屋に若い男が入ってきた。よく見ると、オユヴァが最近しばしば足を運んでいた質屋に雇われている者だと判った。
彼は、緑色の蚊帳の暗闇に控えるオユヴァに気付くことなく、静かに立っていた。いや、持っていっていいような何かがないかと、立ちながら目で探し回っていた—イエモンはさぞかし、朝方にちょっとした借金をしたのであろう。
その時、彼の目はやや新しい、きれいな蚊帳に留まった。その紐を一本解かんと手に取った。
オユヴァは昨夜を思い出した。ぶんぶんと音を立てる蚊を、病を煩った我が子を思い出した。
身を起こし、部屋の片隅に既に緩めた蚊帳を両手で掴み、苦痛に吼えながら人の手からぐいと引っ張ろうとした。
若者が放さんとしなかった蚊帳にからまった彼女の爪は、指から、まるで枝から熟した果実であるかのように落ちていった。
オユヴァの痣だらけの顔にほとんど禿げた頭と歯なしの口を見るや否や、彼は悍しい絶叫をあげて、蚊帳を手から離し、道の闇に逃げてしまった。
半分緩まった蚊帳は地面に落ちて、オユヴァとその子供を覆ってしまった。
しかし子は目覚めなかった。蚊帳との接触も、母の絶叫も子を起こせなかった。虫の知らせで、オユヴァはその頬へと身を傾けた。
赤ん坊は死んでいた。
現実の恐ろしさのあまりに、そして我が幸せや望みの喪失に征服された彼女は、我が子の屍の傍に失神して横たわった。目が覚めた時は既に闇になっていた。
彼女の病は絶調に達した。熱で燃える彼女の身体は力を失ってしまった。
ただ横になって、静けさに耳を澄ましていた。自分の状態を悟り、明くる朝までもたないことは判っていた。常から愛していたイエモンに、たった一度でもいいから会いたいと思った。謙虚で忠実な妻として、彼に別れを告げたかった。
夜中頃に、誰かが門の扉を空ける音が聞こえた。
タミヤイエモンだった。家へ帰った。小さな提灯で足もとを照らし、部屋へ入ると、そのどんよりした光で彼だと判った。
精一杯で膝まで身を起こし、地べたを這って落ちた蚊帳を持ち上げた。
この恐ろしい、人間に似合わぬヤツがポンと這い出るのを見たタミヤイエモンは呆然とした。
彼は、彼女の痣だらけの顔、その大きく突き出た目、まばらな髪の毛、歯のない口を目にした。
赤ん坊が死んだこと、彼女自身も死にゆくこと、彼らの住処を神々の憤怒が訪れたことを、彼女は叫びたかった。彼に慈悲を請うつもりであった。しかし彼女の声は病んでいる口に遮られ、傷を負わされた獣のような、分節のない呻きとして口外に出た。
そして、彼女が痩せこけた、爪のない手でイエモンの着物の裾を掴むと、イエモンは片方の刀を抜いて、この謎めいた、怖いものを斬ってしまった。

オユヴァという受難者、かつての美しき貞女は彼の足元に死に倒れた。
タミヤイエモンはやっと今、光の中で、謎めいた病によって醜くなってしまった妻だと判った。また、彼女を刀で殺した事、生まれたばかりの赤ん坊までが死んでいる事を判った。
この偶発的な出来事によって、彼は、妻を処分し今は自由の身になった事、そして、この事件に何の罪もない事を意識した。
そして二度と帰らぬように、軽い悲しみの心境とともに自宅を離れた。—
イトウジュウベイとその娘ツユはオユヴァの死の知らせを平静に受け止め、結婚の妨げに始末がつけられたので、ホッとしたようにみえた。
婚礼を出来るだけ早く行われるようにと定めた。
ツユとイエモンは熱愛に落ちた。
オユヴァと赤ん坊が葬られ、イエモンは過ぎ去った出来事を忘れていった。今は嫁の父の家に住むようになり、昔住んでいた家を訪れることがなかった。—
婚礼の前日に、婚姻に既婚届けを出す為に、何枚かの書類がどうしても不可欠だと知った。これらの書類のある場所は、前に棲んでいた四谷の自宅であった。
即座に目的地へ向かった。
暑い日の遅い午後のことだった。日はゆるりと沈もうとした時だった。東京の路地は歩行者と俥屋たちで賑わっていた。
タミヤは、日没前に自宅にたどり着いた。貧しい路地は殺風景で、民家の玄関先は塵埃でみち、数人の子供達が犬と遊んでいるだけであった。
彼の家は空だった。オユヴァの葬儀の日以来、敷居を跨いだ人は誰もいなかった。
傾いた太陽の光は、紙の窓を通して物寂しい部屋へと進入していた。小物や白い畳の上には埃が積もっていた。タミヤイエモンは、一瞬少しばかり震えた。なぜなら、彼が知っていたこの場所は、あの恐ろしい晩、自らの刀でオユヴァを死なせたその瞬間のことを思い出させるからである。
自分の部屋の押入にある引き出しを開け、探し求めた書類を中から取り出した。全ては秩序立っており、もとのままにあった。
引き出しを閉めてから、隣の部屋に誰かが深い溜息を付いているように聞こえた。
しばし躊躇した。
この家にもしや住民が入ったのか。扉はしっかりと閉じてあったはずなのに。
イエモンは少しばかりおののいた。自らの興奮を乗り越え、戸へ近づきそして手の一振りで開けた。
部屋には、妻のオユヴァ、病で醜くされていない、子供が生まれる遥か前のような元気に満ちたオユヴァが立っていた。紅葉模様で飾られた黒地の着物を身にまとい、青白い顔は俯いていた。
「お前は元気になって帰って来たのか」
とイエモンはかん高い声で訊ねた。
彼の頭は混乱し、心細かった。オユヴァは本当に死んだかどうか、彼はその瞬間、自分にはっきりと答えることができなかった。
彼は引き戸に手をついた。
しかしオユヴァの眼は、主人に一目でもみられることが価しないように、傾いたままだった。ただ新たな、はっきりと聞こえる溜息が彼女の胸からあがっただけであった。
彼女が生きていたのを確認したいイエモンは彼女の手を掴もうとしたが、オユヴァの姿は消えてしまった。気がつくと、その白い、か弱い手の代わりに、イエモンは衣桁に掛けてあった彼女の黒地に真っ赤な紅葉模様で飾られた着物の袖を掴んでいたのだった。
目を擦った。
鼓動が響いていた。しきりに息をし、額に汗のしずくが群った。暗くなりゆく家をさっさと出て、闇があまねわる路地にふらふらと入った。
「単なる幻覚だった！回想に耽って、そのあまりに興奮した！」
と嫁の待つ家への道すがらにイエモンは自分を慰めていた。—
明くる日に婚礼がととのえられた。
タミヤは落ち着くようになり、忘れようとした。過ぎ去った出来事を幻、幻覚に脅えたためであっただろうかと考えていた。今は、日本橋にあるイトウジュウベイの豪邸に居を構え、ゆったりと幸せに暮していた。我が新妻を優しく敬愛した。
本分を尽くし、受難者の先妻の事を、彼はとうとう忘れてしまった。
ある日、友人たちと遊んだイエモンはいつもより遅く帰っていた。深夜に近づき、その晩は星も月も見えなかった。古い松の枝や竹がはみ出る垣根に挟まれた路地を歩くと、向こうから若くて、華麗な着物を身に纏った女性が歩いてくるのが見えた。彼女は眠っている赤子を抱いていた。イエモンを待ち伏せるように、彼女はどんよりした街灯の下で足を止めた。
イエモンが近づくと、彼女は
「もし、」
とイエモンに弱い声で言い、
「この子を抱いておくれ、下駄の鼻緒が切れました。」
彼女の美貌を見たイエモンは、逆らうことなく、赤子を抱いた。
こわれた下駄を直さんと女性は数歩ばかり離れていった。

起こされた赤子は不満足しそうに泣いたが、後に静かになった。
イエモンは影に蹲る若き母の方を眺めていた。
赤子は段々重くなっていくように思えた。イエモンは自覚を疑うほどだった。もはや支えられないと、不安になって見知らぬ女性を見た。
すると、彼女は身を起こし、短くそして鋭く笑った。イエモンはどんよりした街灯の光に浴びているのが亡きオユヴァであることを判った。
その瞬間、蝋燭をぱっと吹き消すように女性の姿が消えてしまった。イエモンは未だ抱いている、鉛のように重い子を見た。
いや、子供どころか、これは墓場でみるような衣を纏う石地蔵だった。
極めて怖しく思えて、イエモンは出きるだけ遠く投げ捨ててしまった。暗い、人気のない路地を逃げ、明るく照らされて活気ある大通りに出ると、ようやくその逃げ足を緩めた。
オユヴァは再びそこにいた。
「もしや彼女は我が新妻のことを嫉妬しているのか。」
とイエモンは寝れぬまま朝まで自らに問い掛けた。
四谷の膏薬売りのチクワンが誰も知らない妙な病で死んだことを明くる朝に誰かがジュウベイに告げた。これを聞いたイトウジュウベイは驚くと同時に悦んだ。恐ろしき事件の証人がこれでいなくなったからである。それにしても、四谷中の住民は、タミヤイエモンの妻が亡くなった奇妙な病の原因を探し出そうと苦悩した。
そうするうちに、四谷から怪しげな噂がたくさん届いた。浪人タミヤイエモンの無人の家から夜毎に悲鳴と泣き声が響き渡るとか。女性の声だとか。隣に棲んでいる人は二度にわたって家に入ってみたというのだが、何もなかったというのだ。
イエモンは物思いに耽って無口になった。人生が悲しく、そして空虚なもののように思えた。若い新妻でさえ、彼を喜ばすことはできなかった。
その様子を見た舅は、山谷に設けた夏の館へ行くようにと若い夫婦にすすめた。環境を変えれば、イエモンは鬱気を晴らすだろう、楽しくなるだろうと考えたからである。
若い夫婦は舅の案を聞き入れた。即座に出発の支度をととのえた。夏は美しくうるおっていた。タミヤは郊外の滞在を楽しみにしていた。東京の路地、彼が知っていた各場所はオユヴァを思い出させる故、しばらく姿を消したかった。
出掛ける前夜の晩御飯を皆で頂きながら、イトウジュウベイは嫌悪で叫んだ。
「ひぇえ、髪の毛だ！御飯に女の髪の毛が入っている！」
と、真っ白い御飯を盛った椀から女性の髪の毛のかたまりを取り出した。
タミヤイエモンは哀れなオユヴァの頭から抜け落ちる髪の毛を思い出し、悲しくなった。明くる朝に山谷へ出掛けた。将軍に官職していたイトウジュウベイは東京に残り、郊外へ行く事が出来なかった。山谷は小さな里で、花に囲まれていた。イトウジュウベイの夏の館は川辺にあり、その支柱は川の流れに濡れていた。
それを見たタミヤイエモンは喜んだ。なぜなら、彼の大きな趣味は釣りだったからである。
平穏と静寂に満ちた美しい日々が続いた。日は蒼穹に昇り、雲一つにさえぎることなく夕方になるとまた沈む。花は酔わせるような薫りを放ち、川のせせらぎの音が聞こえた。タミヤは落ち着いた。オユヴァの執念深い幽霊の力は東京の郊外に及ばないことを判った。イエモンはただ平安でいられることを確信していた。このような自然に囲まれて彼は自由な呼吸ができた。妻と散歩しながら日々を過ごし、或いは、二人で庭に腰を掛け、川の静かなせせらぎの音に耳を澄ませていた。
愛と平穏の日々は再びやってきた。
イエモンは時折、家の広い縁側に腰を掛け、魚釣りを楽しんでいた。しばしば魚の捕獲が多かった。
ある日の午後に青空に雲が現れた。釣りに最適な時だとイエモンは思った。道具をととのえ、縁側に腰を掛け、釣り針を川の流れに投げた。
雲は一層大きくなり、暗くなった。魚一疋も餌に食いつかなかった。
ようやく、自らの釣り道具が強い手応えをした。
イエモンは全力で引き、捕獲は水から浮かび上がった。
魚ではなかった。女性の着物であった。先妻の、黒地に真っ赤な紅葉で模様された着物であった。
イエモンは恐ろしい悲鳴をあげた。
近くにいた妻のツユは驚いてやってきた。
「ごらん！哀れなオユヴァの着物だぞ」
と恐怖で目を覆いながら言った。
彼らが死んだ女性の謎めいた着物を見ているうちと、後ろの紙で張られた襖が騒がしい音と共に開いた。
黄昏で暗くなった部屋に、臨終の時と同じように恐ろしい、生々しいオユヴァが立っていた。その首はイエモンの刀による血だらけの切り傷で損なわれていた。
最初に落ちた稲妻の光は恐ろしき亡霊を照らした。亡霊は伴なう雷とともに消えてしまった。
ツユは気を失い、床に倒れた。
滴る激しい雨はイエモンを仰天から覚ました。
失神した妻を抱き上げ、家へと運んだ。

イエモンは彼女の正気を取り戻すのに時間を掛け、苦労した。
外は嵐が荒れ狂い、雨がヒューと音を立てる中、ツユが目を覚まして痛哭していた。
もし、二人ともに恐ろしい亡霊が見えなければ、もし、外の縁側に黒地に真っ赤な紅葉模様に飾られた女性の着物が横たわっていなければ、イエモンは、これはもしや幻、幻覚ではないか思ったであろう。
オユヴァは彼らの夏の館まで訪ねてきたに相違なかった。
ツユは、悍しい驚愕から立ち直らず、その晩に熱を出した。
いつのまにか嵐が去り、全景色を風が吹く夜が覆ってきた。
強風の次ぎから次ぎへとくる直撃で家の窓が震えるなか、タミヤは妻の寝床の傍に付き添って、人生のなかで極めて恐ろしい一夜を過ごしただろう。ツユはしばしば驚倒して、熱で裏切られたオユヴァの名前を呼んだ。
夜が明けたときにイエモンは安心した。
その日、山谷を後にし、病をわずらう妻とともに東京に帰った。
病人を乗せた駕籠はゆっくりとしか進まないので、長い帰路になった。
ようやく夕方になって町にたどりつくと、イトウジュウベイの家がふさがり、静けさに耽っていた。長く待って、戸を叩いたあげく、怖がる使いが開けた。
「旦那様は重病をわずらって寝ておられます」と悲しげに言った。
病気の妻を寝室で寝かせてから、イエモンは舅の病床へと急いだ。
イトウジュウベイは奇妙で知られざる病気で倒れ熱を出し、横になっていた。彼の髪の毛の半分は抜け落ち、口には歯の一本もなく、顔中が醜い赤い痣で覆われていた。
タミヤには、彼が先妻オユヴァと同じような病気をわずらっているように思えた。
イトウジュウベイは激痛で苦しんだ。
数夜、痛哭しつづけた。
金貨が入った金袋、真っ赤な薬、早かった婚礼についてうわ言をいっていた。
イエモンが山谷から帰ってから三日目に亡くなった。
オユヴァの復讐は恐ろしかった。恨みを晴らそうとした。
自らの苦しみのため、子のため、夫を愛していた情のために彼女は恨みを晴らそうとした。
次ぎに何が起こるかと待ちうけたイエモンは震えていた。彼の妻ツユは、寝床から起き上らなかったどころか、日に日に弱っていった。彼女の前では父の死を隠し、イトウジュウベイが亡くなったことは知らせなかった。
彼女がたまに父のことを聞いても、将軍の勅令で京都の御所に行かされたとイエモンに慰めていた。
彼は彼女を本当に愛していた故に、看護をできるだけの思いやりと配慮で世話した。彼女を失うなんてと思うと、彼は今にも気が狂いそうだった。
日も夜もイエモンの家からは泣き声、女と赤子の鳴き声が響き渡るという知らせが毎日のように四谷から届くようになった。
家の前に人が集まり、胸を引き裂くような痛哭を恐ろしくも聞いていた。
「これぞタミヤイエモンの裏切られた妻オユヴァの幽霊じゃ！」
と人々が口々に言った。
「復讐したいがために泣いているのか」
と女性たちが言った。
「男やもめの若く、きれいな妻に嫉妬しているぞ」
と男たちは思った。
役所の命令で家は幾度も取り調べられたが、何も見つからなかった。家は静かでそして空になっていて、ただ、畳の上に積もった埃に、女性の裸足の足跡があった。
イエモンはこのような知らせを知らされる度に恐ろしさで震えていた。病気をわずらっている婦人の前でこのようなことを言わぬようにと命じた。亡き者の祟りを避けるために、四谷の家を打ち壊し、そして壊滅するようにと命じた。
ツユは少し回復しそうになった。彼女の口は微笑みをみせるようになり、頬は薄く赤らむようになった。タミヤは嬉しかった。そして、明くる日に満開の蓮の花を見に一緒に上野へ行く事を勧めた。
外はいかに晴天で、日が照り、東京人は皆、蓮の花を褒め称えるかを彼女に物語った。
ツユは喜び、そして微笑んだ。
ツユは再び健全になったという主人の言葉を確認しようと、銀で作られた自分の鏡を手に取った。
そして、その中を覗いた。
目を瞠って悲痛な絶叫とともに鏡を部屋の隅はるかまで投げ捨てた。そして、畳に泣き崩れてしまった。
タミヤイエモンは驚いて駆きつけ、優しそうに妻を持ち上げながら訊ねた。
「愛しい人よ、何にそんなに驚いたのか。いったいどうしたというのだ。」
彼女は泣きながら、鏡で見たのはオユヴァだったと。腫れた顔の、禿げ頭の、歯のない、謎めいた病気の赤い痣の醜いオユヴァを見たと答えた。
ツユは熱に陥り、寝床から立ち上がらなかった。
四谷から追い払われてしまったオユヴァは、日本橋の彼らの家にとり憑いた。
夜毎にものを叩く音、床がギシギシなる音が疑わしくも聞こえた。誰かが通るかのように、障子がしんとして開け閉めをした。

ツユの熱はなかなか下がろうとしなかった。オユヴァの名前を呼び、父を連れてくるように、皆に頼んでいた。

この願いの返事としては、どこからか聞えてくる嘲笑いだった。病人が笑うか、それともオユヴァが儚い願いをあざ笑っているのか、イエモンには判らなかった。

イエモンは数日にわたって朝から晩まで病気の妻の寝床にしゃがみ、泣き止まず、絶望で頭から髪の毛を毟っていた。

しかしツユはもはや彼だと意識できなかった。熱から立ち直らなかった。三日間が過ぎつつあった。死との彼女の戦いは恐ろしいものだった。

彼女が苦しんでいるのを見てイエモンも苦痛を覚えた。ある日の夜中に亡くなった……その夜以来、家中は静かだった。オユヴァはその存在を現すことを止めた。

トントンという音も、目に見えない足の重さで畳が凹むこともなくなった。扉の開け閉めも止んだ。

悲嘆に暮れたイエモンは、家が静寂で平然としていることにもはや気がつかなかった。

愛しい亡き人を偲んで、彼が、自らの家の部屋で泣き止まない間、お岩の幽霊は四谷の家の跡を廻り、悲哀で嘆いていた。

貧乏人の町の暗い路地をさ迷う女性の影、赤子を抱擁する、唸るようで悲しそうな泣き声の母の影について、東京中に噂がたった。

イトウジュウベイの家の騒動は、四谷の幽霊といかに関係しているか話し出されるようになった。タミヤイエモンは閉じ篭った。

その悲しい人生を日本橋の家、舅と妻が継いだ家の薄暗い部屋で過ごしていた。みるみる衰弱した。平安の日々の次ぎに再び悲哀の日が始まった。

亡き者は懲りずに、また自らの存在を現し始めた。

イエモンは食事中に怪しいものを見つけるようになった。汁に女性の髪の毛、御飯に人間の歯、魚のタレの中には人間の爪を。

何も食べることができなくなった。

人生は彼にとって苦しくなった。

謎めいた音、トントンとする音、壁の震え、目に見えない足の重さで窪む部屋の畳に脅えさせられていた。

時に、夜中に自分の名前を大声で呼ばれることで起こされ、寝床から身体を起こすと、再び静けさになった。

今にも気が狂いそうだった。

ある日の晩、彼の悲痛が絶調に達する時に、彼は寝室の影に疲れて横たわっていると、ひそやかに障子が開いてまた自ら閉まった。

イエモンは驚倒して目を見張ったが、誰も見えなかった。歩みの音が聞え、柔らかい畳が窪んでいることも目に見えた。そして、歩みが止まった。畳の上に横たわっていた手鏡が動いた。そして、それは人間の高さまで浮かび上がると、そのすべすべした面はイエモンの方に回転して、その中に写っていたのは亡きオユヴァの恐ろしき顔であった。

イエモンは寝床から飛び上がり、部屋、いや、家を後にし、人の目を気にせず黄昏時に覆われた路地を逃走した。

歩行者は振りかえり、立ち止り、彼はきっと狐憑きだと言っていた。

タミヤイエモンは走りに走って、そして当時今より遥かに小さな東京の郊外まで走った。そこにあった仏教寺の境内へ走り込み、その寺院の階段で泣き崩れた。

住職、坊主たちが来て、泣いている男を慈悲高く助け起こした。

イエモンは自らの人生の苦難を語り、犯した罪を後悔し、自らを仲間にするようにと合掌した。

彼の惨めさに同情し、ふびんに思った。後にイエモンは剃髪して彼等の宗派の弟子となった。

そこで知性高き男性たちが集まり、受難者の魂のために、あの世で成仏できるように寺院を建立することを決意した。町中は既にオユヴァの人生歴を知って、寺院建立のためにさまざまな寄付が集め始めた。

不幸で、死んでも安らかざる受難者オユヴァの名を今日もなお伝えるオユヴァ稲荷大明神という新しいお宮は、その時からまもなくして四谷に建立された。

南無、南無。

本稿を執筆するにあたって大変厚いご指導を頂いた早稲田大学大学院文学研究科教授古井戸秀夫氏、長澤蘆雪の落款について御教示下さった同大学美術史教授星山晋也氏、芳幾について教えて下さった同大学大学院在籍の桑原博行氏、馬頭町広重美術館学芸員折井貴恵氏、ホロウハの生涯の詳細について教えて下さったプラハ国立美術館東洋部学芸員のヘレナ・ホンコポヴァー氏、プラハ・ナープルステク博物館所蔵幽霊図・ホロウハ遺品・遺著について教えて下さった同博物館日本部学芸員のアリツェ・クレメロヴァー氏にこの場を借りて改めて深く御礼申し上げる次第である。

この論文の校正を見ている時に、悲しい知らせが入った。チェコ共和国の母校、カレル大学の恩師、ダナ・カルヴォドヴァー教授が二〇〇三年十月三一日にプラハにて急逝されたとの訃報が入った。中国、日本の演劇をこよなく愛し、多大なる研究業績を残された先生の御霊にこの小論を捧ぐ。

注（1）Hloucha, Joe: *Pavilon hrůzy*（『恐怖の東屋』）、Jan Kotík, Praha-Smíchov, 1920,（九五～一一六頁）。なお、『オユヴァイナリダイミョウジン』は *České horory*（『チェコホラー集』）、Hlaváč, Jan, Knotek, Jiří 編、Plejáda 出版、Praha, 2001にも紹介されている（一七〇～八三頁）。

（2）Janoš, Jiří: *99 zajímavostí z Japonska*（『日本に興味を持つための99話』）、Praha, Albatros, 1986, 一四六～五〇頁に *Oiwa - strašidelný přízrak starého Eda*（『古き江戸の恐ろしい幽霊お岩』）が収載されている。

（3）Kalvodová, Dana（一九二八～二〇〇三）、Novák, Miroslav（一九二四～八二）共著：*Vítr v pinitích - japonské divadlo*（『松風―日本の演劇』）、プラハ、Odeon（オデオン）出版社、一九七五。この本に書かれた日本演劇は2つの側面から紹介されている。一つはノヴァーク教授の日本戯曲の翻訳で、もう一つはカルヴォドヴァー教授による日本演劇の様式についての演劇学的かつ網羅的な解説である。まず、謡曲『忠度』、『松風』、『景清』、『隅田川』、『船弁慶』、狂言『千鳥』、『二人袴』、『鬚櫓』、人形浄瑠璃『心中天網島』が載せられ、歌舞伎の戯曲として『矢の根』と『東海道四谷怪談』が掲載されている。中心は中世演劇の能狂言で、近世演劇では近松門左衛門の浄瑠璃と鶴屋南北が中心になっている。尚、276～320頁に掲載されている『東海道四谷怪談』のチェコ語標題は *Podivný příběh z Jocuji* である。翻訳は、全編にわたるものではなく、部分訳である。翻訳は三幕目「砂村隠亡堀の場」の戸板返しの部分と四幕目「深川三角屋敷の場」のみである。人間のドラマとして名高い四幕目の「深川三角屋敷の場」はその中心となっている。各幕の梗概や、三幕目の「砂村隠亡堀の場」の抄訳があり、伊右衛門の台詞「覚の杉戸」に始まり、「又も死霊の」に続くト書きに終わっている。続く四幕目の「深川三角屋敷の場」が一幕全部翻訳されている。しかし、お岩が幽霊になる場面は翻訳されていない。怪奇現象のほとんどは梗概にまわされており、読者の前では翻訳としてお袖と直助のドラマが展開されている。言い換えれば、もし梗概がなければ、お岩の存在は脇筋で隠されたままになってしまう。お岩の気配がするだけである。また、『東海道四谷怪談』は *Antologie japonského divadla - Kalhoty pro dva*（『日本演劇アンソロジー――二人袴』）、Brody 出版、Praha、一九九七年に再掲載されている（一九九～二三二頁）。

（4）Kořenský, Josef: *Po druhé v Japonsku*（『二度目の日本にて』）、Praha, J. Otto 出版、一九一〇。一〇六頁に、チェコに於ける日本についての最初の報告は、日本遣欧使節がローマ法皇グレゴリウス十三世に謁見するためにローマに参上したという文章を一五八五年に翻訳した、オロモウツ市の司教スタニスラフ・パヴロフスキーによるものだとされている。また、F.L. リーグル編集の下で一八六〇年から出版されていた最初のチェコの『百科事典』（*Slovník naučný*）に於いて、鎖国当時の「日本」という、八頁に及ぶ項目がある。

（5）Kořenský, Josef。生物、物理、ドイツ語、声楽などの教師としてさまざまな学校で教鞭を執り、地質学、鉱物学、古生物学、植物学、昆虫学を研究（一九二七年にプラハ・カレル大学生物学部名誉博士号を授与）。1893～4年の間、北米、ハワイ諸島、日本、中国、マレー群島、ジャワ、セイロン島、インド、エジプトを一周し、蒐集活動を行なった。また、一九〇〇～〇一年の間、オーストラリア、タスマニア、ニュー・ジーランド、トンガ、サモア群島、フィジー諸島、インドネシア、マレー群島、日本、朝鮮半島、シベリアを一周。

（6）文部省は著者に交付した招待状を『ジャポンスコ～ボヘミア人旅行家が見た一八九三年の日本』、三九頁、に参照。

（7）Kořenský, Josef. *Cesta kolem světa 1893-94*（『世界一周旅行――一八九三～九四年』）、Praha, 一八九六～九七。上下二巻。日本を題材にした旅行記は第一巻の大部分を占める。邦訳に、ヨゼフ・コジェンスキー『明治のジャポンスコ』（鈴木文彦訳、サイマル出版社（一九八五年）、新しくは『ジャポンスコ～ボヘミア人旅行家が見た一八九三年の日本』（鈴木文彦訳、朝日文庫、二〇〇一年）がある。

（8）Smejkal, J.V.: *Milenec Nipponu - tři lásky Joe Hloucky*（J.V.シュメイカル著『日本を愛す男～ヨエ・ホロウハの三つの愛』、プラハ、Zemědělské nakladatelství A. Neubert, 一九三一年、三一頁

（9）Ibid., 三一頁

（10）Hubner, Alexander, Graf von（一八一一～一八九二）、*Promenade au tour du monde*（『世界周遊記』）、チェコ語訳 A. Hübner: *Procházka kolem světa*, Praha, František Šimáček 訳, 一八八〇がある。邦訳『オーストリア外交官の明治維新・世界周遊記』、市川慎一、松本雅弘共訳、東京、新人物往来社、一九八八年がある。

（11）Vráz, Enrique, Stanko（一八六〇～一九三二）、チェコの生物学者、旅行家。20歳弱にしてアフリカへ旅立ち、5年間の滞在を経て、一八九二年に南米（2年滞在）、後に中国、日本、ボルネオ、ジャワなどを訪れる。蒐集家、作家として活動。数百に渡る講演を啓蒙的に活動。

（12）Holub, Emil（一八四七～一九〇二）、チェコの医師、冒険家、生物学、測地学、地理学にも携わった。一八七二年に南アフリカのダイヤモンド産地に旅立ち、アフリカ各地で蒐集を行った。

（13）注（8）参照、三二頁

（14）Boháčková, L., Suchomel, F.:『チェコ共和国に於ける日本美術蒐集とナープルステク博物館の日本美術』、日本国際文化研究センター・海外日本美術調査プロジェクト報告三『ナープルステク博物館所蔵日本美術品図録』、京都、一九九四年二月二八日発行

（15）注（8）参照、三三頁

（16）Honcoopová, Helena: *Joe Hloucha*, Symposium orientalistů 23.5.2003, NG Praha Zbraslav（ヘレナ・ホンコポヴァー『ヨエ・ホロウハ』、二〇〇三年五月二三日プラハ国立美術館ズブラスラフ別館開催東洋学者シンポジウムの発表）

（17）注（8）参照、三三頁

(18) 邦訳に、ピエル・ロチ『お菊さん』、野上豊一郎訳、岩波書店、東京、一九三七年がある。
(19) 注(16)参照
(20) 注(8)参照、三七頁
(21) Loti, Pierre（一八五〇～一九二三）本名ジュリアン・ヴィオ（Louis Marie Julien Viaud）、ブルターニュの港町ロシェフォールに生まれ、幼い頃から海と遥かな異国に対する憧憬を抱く。フランスの海軍士官で学士院会員となり、軍艦に乗って世界中を旅し、その様々な体験を基に小説、紀行を書く。一八八五年（明治一八年）七月、三五歳のときに長崎の地を踏み、同年暮れまで神戸、京都、横浜、鎌倉、東京、日光など各地を訪れた。長崎に於ける日本娘との同棲は『お菊さん』（Madame Chrysanthème, 一八八八、パリ）を執筆し、日本各地を訪問した折の印象は『秋の日本』に纏められた。『お菊さん』はチェコ語に訳されたのは一九〇五年（O.Theer 訳）、『秋の日本』は一九二一年、訳者 Franta Štěpánek は、自らの翻訳をホロウハに捧げると同訳書の五頁に記述している。
(22) 注(8)参照、四〇頁
(23) Ibid., 四五頁
(24) 注(16)参照
(25) Kotěra, Jan（一八七一～一九二三）チェコの近代チェコ建築の先駆的存在。チェコの建築は19世紀末から豊かな装飾性が主流となり、分離派（セセッション）様式が各地に広がる。表現の記念碑的単純性を求める。ヤン・コチェラはウィーン巨匠オットー・ワグナーに指示。ちなみに、大正四（一九一五）年に広島奨励館（現原爆ドーム）を設計したチェコ人ヤン・レツルの大学時代の指導教官でもあった。
(26) 注(8)参照、六八頁
(27) 注(16)参照
(28) 注(8)参照、六九頁
(29) Drtikol, František（一八八三～一九六一）チェコの肖像写真家、哲学家。彼の初期作品にはアール・ヌーヴォーの影響がみられるが、後に象徴主義へと移った。一九一〇年にプラハのヴォジチュコヴァ通り7番でアトリエを開き、写真は主として依頼肖像写真や全裸写真を一九三一年までに手掛け、名声を浴びる。写真家としてのキャリアーを経て哲学に耽る。
(30) 独訳に Hloucha, Joe: *Der Garten der Liebe*（『愛の園』）、Josef Ziegler 訳、一九二九年がある。
(31) 注(16)参照
(32) 一九四九年版はプラハの Orbis 出版から出たチェコ語版である。なお、一九五五年にプラハの Artia 出版社で英訳、Hloucha, Joe: *Hokusai - The Man Mad on Drawing* がある。
(33) Chaloupka, David: *Otakar Štáfl a jeho japonské motivy*（『オタカル・シュターフルとその日本的モティーフ』）、Nový Orient 誌、五〇号、プラハ、一九九五、三四八～五〇頁
(34) 例えば、プラハのヴィリーメック出版の、明治二九（一八九六）年の大地震を題材にした『洪水』（*Zátopa*）の第2版の表紙等。
(35) 諺辞典に、「墨は餓鬼に磨らせ筆は鬼に持たせよ」の項目に墨を摺るときにはなるべく柔らかくし、筆を使うときには力を込めて勢い良く書くのが良いということ、とある。
(36) 落合芳幾（一八三三～一九〇四）幕末・明治時代初期の浮世絵師。歌川国貞の門人。
(37) 長澤蘆雪（一七五五～一七九九）江戸時代中期の書家、圓山応挙の門人。
(38)『大妖怪展』朝日新聞社、二〇〇〇年、（福岡県美術館、兵庫市歴史博物館、大丸ミュージアム KOBE, 大丸ミュージアム KYOTO）の図録に中右瑛氏の解説を参照。
(39) ホロウハは、一九二九年一一月～一九三〇年五月の間、「ヨーロッパ以外の美術工芸第一展」（První výstava mimoevropského umění a uměleckého průmyslu）と題してプラハで開催し、一九三〇年一二月三、四日に行なわれたベルリン・オークションに同展を参加させて部分的に販売した。
(40)『日本国語大辞典』、小学館、東京、一九七五年、「日待」項目
(41)『日本民俗大事典』、吉川弘文館、東京、二〇〇〇、四三七頁「ひまち」項目参照。
(42) 庚申待ちというのもあり、庚申の夜、仏家では帝釈天および青面金剛を、神道では猿田彦を祀って、寝ないで徹夜する習俗。その夜眠ると、人身中にいる三尸（さんし）が罪を上帝に告げるとも、命を縮めるという。中国の道教の守庚申に由来する禁忌で、平安時代に伝わり、江戸時代に盛行。
(43) 注(1)参照、一三頁
(44) 独訳に、Hloucha, Joe: *Der Kopf des Bonzen*, Gustav Just 訳、in: Ivan Slavík 編集 *Zum Roten Drachen*, Suhrkamp Phantast. Bibliothek がある。
(45) 上演資料集『東海道四谷怪談』、国立劇場芸能調査室、一九七一年九月
(46) 歌舞伎観劇に関する記述は Hloucha, Joe: *Vzpomínky na Japonsko*（『日本の想い出』）、F. Sinácek 出版、Praha、一九〇八年、六四～七頁、一三六～三八頁
(47) de Benneville, James Seguin.: *Tales of the Tokugawa, The Yotsuya Kwaidan or O'Iwa Inari*（『徳川物語――四谷怪談、或いはお岩稲荷』）、B. Lippincott Company, Philadelphia, 一九一七。序文に、お岩稲荷の詳細が記されている（七～一二頁）。また、二四七頁に、「享保二年二月二二日（一七一七年四月三日）に田宮家の婦人を供養するためにお稲荷が建立」とある。越前掘の「田宮稲荷大社」のお岩様の図も掲載されている。しかし、ホロウハがこの本を知っていたかは不明。
(48)『於岩稲荷来由書上』、新潮日本古典集成『東海道四谷怪談』、東京、新潮社一九九三年、四一六～一九頁
(49)『四谷雑談集』、『日本怪談集　江戸編』、高田衛編、東京、河出書房新社、一九九二年、一三四～二〇七頁
(50) Ibid., 一三六頁

図5　ヨエ・ホロウハ著『恐怖の東屋』「オユヴァイナリダイミョウジン」のオタカル・シュターフルによる挿絵（個人蔵）

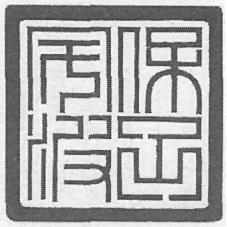

図2　ホロウハ蔵書印〈保呂宇波〉（個人蔵）。

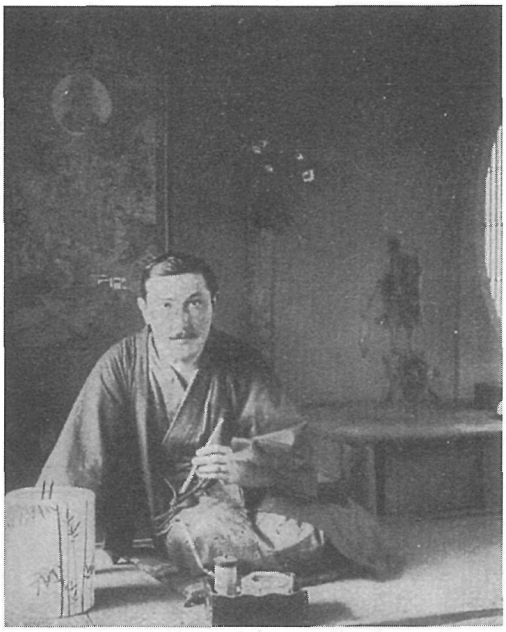

図1　ヨエ・ホロウハの肖像写真（1906年日本滞在中）（個人蔵）。

図4　ヨエ・ホロウハ著『恐怖の東屋』の表紙（裏）（プラハ・ナープルステク博物館蔵）。

図3　ヨエ・ホロウハ著『恐怖の東屋』の表紙（表）（プラハ・ナープルステク博物館蔵）。